ティン値より原発性肝癌の存在が疑われた.

結論：RI シンチは，原発性肝癌の一次スクリーニング法として有効であるが，さらに超音波と α_1-フェトプロティン検査の併用により，検出率の大幅な向上が可能となる.

17. 肝・胆道シンチグラフィーの診断的意義と限界

油野　民雄　　小泉　　潔
一柳　健次　　多田　　明
桑島　　章　　利波　紀久
久田　欣一
（金大・核）

超音波や CT の普及した現在，肝胆道疾患における肝胆道シンチグラフィーの診断的意義を，過去 200 例の ^{99m}Tc-IDA (^{99m}Tc-dimethyl IDA 140 例，^{99m}Tc-diethyl IDA 60例) による肝胆道シンチグラフィー経験および文献上の報告から，考察してみた.

閉塞性黄疸の内科的か外科的かの鑑別診断，特に外科的黄疸の評価に関しては sensitivity が96% と高値を示したものの，false positive も 21% と高値を示した．false positive が高値を示した最大の原因は，高度黄疸時での内科的か外科的かの鑑別がシンチ上では不可能であることに起因すると思われた.

胆嚢疾患の評価については，胆嚢疾患の82%で胆嚢像が認められず，特に急性胆嚢炎では全例胆嚢像の陰性所見を示した．そのほか，肝内胆管結石の検出や，体質性黄疸の鑑別，乳児肝炎と先天性胆道閉鎖症との鑑別に関し有効であった.

以上，肝胆道シンチグラフィーは臨床上有意義な検査法と思われたが，最大の臨床的適応である閉塞性黄疸の鑑別に関しては，false positive は著しく高く，超音波や CT に比べ診断的意義は少ないと思われた.

18. ^{99m}Tc-diethy-IDA による肝・胆道系シンチグラフィの検討

仙田　宏平　　佐々木常雄
三島　　厚　　小林　英敏
松原　一仁　　改井　　修
真下　伸一　　石口　恒男
大鹿　　智　　児玉　行弘
大野　晶子
（名大・放）

肝・胆道系シンチグラフィ用の新しい ^{99m}Tc 標識製剤である ^{99m}Tc-diethyl-acetanilidoiminodiacetate の有用性を基礎的ならびに臨床的に検討した.

その結果，以下に述べるごとき成績が得られた. (1) 本製剤の放射化学的純度および安定性は，ペーパークロマトグラフィを用いた検討で，十分に満足できる成績を示した．(2) 24時間尿中排泄率は，正常例で 7.5±0.9% と算出され，総ビリルビン値 1.1～3.1 mg/dl の患者でも 10.7±1.8% と低かった．(3) 肝影の描出は，総ビリルビン値 7.4 mg/dl 以下の例で明瞭に見られ，15.9 mg/dl の例でも認められた．(4) 心ヒストグラム下降脚の 10 分以降の半減時間は，正常例で 24.3±3.7 分と算定され，他のパラメータと同様に総ビリルビン値を反映した．(5) 肝ヒストグラムのピーク時間は，正常例で 10.3±1.3 分となり，正常例，総ビリルビン値 1.0 mg/dl 以下および 1.1～3.1 mg/dl の疾患例の 3 群の間で有意に分離した値を示した.

上述の成績から，本製剤は，従来の ^{99m}Tc 標識製剤と比べ，尿中排泄率が非常に低く，また肝での摂取能が高いと考えられる．従って，本製剤は肝・胆道系疾患の形態診断のみならず，機能診断にもより有用であると判断した.

Presented by Medical*Online